

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の「僕」は、母親の勧めで毎週土曜日の午後には、昨年結婚した従兄（就行）の結婚相手の「ホナミさん」のところに通って数学と英語を教わることになった。

ホナミさんの都合で二週間ほど家庭教師が休みになった。別の曜日の放課後に行く案も出たがお互い a チョウセイ がつかず、電話で宿題が追加されるにとどまった。翌々週の土曜日の朝、午後は家庭教師だと思いつつぼんやりしていると居間の電話が鳴った。台所の母親が顎でしゃくつたので出るとホナミさんだった。「あ、あのね、ヤゴがいま羽化しようとしているの。見にくる？」時計を見た。朝の八時半過ぎ、勝手に、ああいう昆虫の羽化は深夜や早朝に行われるものだと思いきんでいた。こんな時間なのか。「え、あ、いいんですか」「うん、いま竹ひご登ってて……どれくらいかかるかわかんないんだけど、もしよかったら。こんな b キカイ 多分滅多にないし」「あ、じゃあ、行きます、はい」「そのまま勉強すればいいし、お昼もうちで食べたらいいから」電話を切り、母親に事情を話し身支度して家を出た。羽化にどれくらいかかるのだろう、自転車をどんなに飛ばしてもその間に全て済んでしまうかもしれない。できるだけ急いで、しかし事故などに遭わないようにしつつ（夏休み中に同じ中学の生徒が一人自転車事故で亡くなっていた。体育館で追悼集会があった）ホナミさんの家へ行った。自転車を置いて鍵もかけず庭へ行くとホナミさんがしゃがみこんでいた。「いま出たところ」ホナミさんはこちらを見てすぐに視線をヤゴのケースの竹ひごに戻した。僕もその隣にしゃがんだ。三十センチくらいのひごの真ん中より少し上あたりに茶色い抜け殻、その上に、黄色いトンボがくっついていた。トンボというか、トンボだと思って見るからトンボだがパツと見たらわからなかったかもしれない。半透明で黄色い細い、マツチ棒より全然細い胴体（とうたい）に作り物のように鮮やかな緑色の筋が入っている。尻の一番先端は茶色が混じったような色でより細くなっている。翅は胴体より薄い白黄色でくしゃつとしている。いかにも出てきたばかりという感じがする。二等辺三角形の顔の二つの頂点に大きな丸い目玉がくっついていて、丸いというか球い薄黄色いその中央に茶色と緑が混じったような帯が通っている。細い脚が竹ひごを掴んで震えている。今日もホナミさんは裸足だった。長い足の指の先端が真っ白に色を失って見える。「速かったよ。思ったよりずっとすぐだった……」ホナミさんの声も少し震えて聞こえた。「ヤゴが水面にいるなあと思ってたら竹ひごに登って……背中が盛り上がったと思っただけで……裂けて、ううん違うな、裂けたっていうかこう、中からぐっと盛り上がって目玉と背中がもりっと出てきて……早送りみたいだった。そこから

体を伸ばして、ときどき左右に震える。ついでにうか揺られて……のけぞってお腹も出して、尻尾が抜け殻に引つかかっているみたいになって、それで体を前後にして竹ひごを脚が挿んでから全身、出てきてね」①ホナミさんが言っていることはよくわからなかった。トンボはもう、僕が来たときより翅が伸びていた。胴体の透明感は薄れ、その分引き締め見ると硬度が増した。黄色と緑のコントラストも強くなった。翅は更に伸び、透明になり、黒い細い線がマス目のようにきっちりした四角形の連続模様となった。逆にみるみる縮んでいく抜け殻からは細い白い糸のようなものが二本飛び出していて、それは多分、殻と体をつなぐなにか神経のようなものだろうと思われた。そんな白い糸は確かセミの抜け殻にもくつついていたはずだ。僅かな風にトンボは体を震わせた。乾くにつれ、揺れるのは翅だけになった。しかし、一枚、背中から見て左外側の一枚だけ、途中まで伸びているのに先端がくちやつと潰れねじれたままだった。明らかに問題、奇形というか、怪我なのか、これでは飛べないのではないか、昆虫の翅は四枚、脚はもちろん六本、空を飛ぶ昆虫の場合、四枚中一枚の翅がだめだったら、それは飛ぶのに不自由するだろう。飛ぶことさえできないかもしれないし、しかもトンボは飛んで狩りをせねばならない。ふらついたり速度が出なかったら狩りをするどころかほかのトンボに狩られかねない。「②トンボって餌えないよね」ホナミさんが言った。「どうだろう」と僕は言った。「ヤゴだって生き餌、貝があったから餌えたけど……トンボの生き餌って、なんだろう、ハエとかてんとう虫とか?」「あー」「虫か?」「うーん」「無理だね」ホナミさんは言った。そして立ち上がるうとしてあつと言つて尻餅をついた。「脚が……。そっちは大丈夫?」「僕はそろそろ立ち上がった。じんじんしたが立てないことはなかった。「若いね」ホナミさんは口の中で笑い、窓に手をつきながらゆっくり立ち上がった。「翅、ダメだよ、あれ」「うーん」「せっかく育てたのになあ……貝だけじゃだめだったのかな」「そういうんじゃないでは」「狭かったかなあ……生まれつきかなあ……私が捕まえるとき傷つけちゃったのかなあ」「うーん」「わかんないか。まあ、野生でもこういうことはある……」「そうすよ」「ねー。でもきれいだね」僕たちはしびれが取れるまでそこで立ったままだった。トンボは動かなかった。翅が日光に透け、格子模様が大きな影になってサッシのアルミ色に映っていた。

部屋に入って、先にお昼にしちやおうかと言つてホナミさんがうどんを作ってくれた。十一時過ぎになっていた。「卵平気?」「あ、はい」「生卵も?」「はい」うどんには卵とネギととろろ昆布とワカメが載っていた。「就行さんがね、生とか半熟の卵が嫌いなよ」「へえ」「知らなかった?」「はい」「私も結婚するまで知らなかった」卵の白身は白くなっていたが箸で触ると中がほとんど生だった。「育ち盛りじゃ足りないよねこれじゃ」「いえ大丈夫です」「ごめんね、冷凍うどん二玉しかなくて」「十分です」「ごめんごめん……」ホナミさんは七味をうどんにたくさんかけた。かけ終わると食わずに立ち上がりレースのカーテンを開けた。竹ひごが見えた。その途中にしがみついている黄色い細い

トンボが小さく見えた。食卓しょくたくに戻もどってきたホナミさんは僕の隣となりに座りうどんなの器を引き寄せた。「こつちだとトンボが見えるから」「ですね」「キイトトンボかな」「ええ」「黄色いもんね」「多分」食べ終え、コップで常温の麦茶を飲んだ。氷切らしてごめんとホナミさんは言った。掬すくいきれなかった卵の白身がつゆの中に漂たよっていた。ぬるい黄身は丸ごと吸った。ホナミさんは黄身も箸くすで崩くずしたらしくつゆ全体が濁にごっていた。もういい？ とホナミさんは言い、器を持ち上げ台所に入り、洗い、それから水で自分の顔を洗った。「私するのがへたでね、うんでもラーメンでも、食べたら顔につゆが跳はねて痒かゆくなるから洗うの。のぶくんは大丈夫？」「あ、大丈夫す」「本当？ みんなそう言うんだよね、どうやったら顔に汁じゆが飛ばないで食べられるんだろう？」そしてふきんを持ってきて食卓を拭ふいて、じゃあ、まあ、勉強しようかと言っているもの、窓に背を向ける位置に座った。

今日は勉強に身は入らなかった。どうしてもトンボを見てしまう。僕が見ているのに気づくとホナミさんも体をねじってそちらを向く。トンボは同じ場所にいる。羽化したてのトンボがどれくらいで飛んでいくのが普通ふつうなのかわからないが、あの翅を思うと時間が経てば済む問題ではないように思われる。数学、休憩、英語、ホナミさんはごく短い間だがアメリカにホームステイしたことがあると僕の母親は言っていたがホナミさんは否定した。「旅行したこともない。誰だれと勘違かんちがいしておられるんだろう」「おつちよこちよいなんです、うちの母親は」「母親ってみんなおつちよこちよいだよ。もともとおつちよこちよいじゃなくてもそうなつちやうんだと思う。いろんなことがありすぎて」「育児とか？」「とか、とか、とか」僕が英文に目を落としてしているとホナミさんが息を飲んだ。「トンボいなくなってるよ！」竹ひごを見ると、確かにトンボがいない。茶色い抜け殻くわだけが残っている。僕たちは立ち上がって窓を開けた。いない。ホナミさんはつかけて庭に出た。僕は玄関げんかんに回って靴くつを履はいた。抜け殻はさつきより縮んで黒っぽくなり、白い糸が飛び出ている。周囲も見たがいがない。「飛べたんだ！」「よかったですね」「本当……」ホナミさんはあちこちを見た。風が吹いている。隣の平屋の庭の物干せんたくもので洗濯物が揺れている。この風に乗って飛べたのだろう。翅は、途中までは正常だったからあれで十分だったのかもしれない……網戸あみども調べ、隣家りんかとの扉へいなども見て、どこにもトンボはいなかった。ホナミさんは竹ひごから抜け殻をそつと外すと「これは記念にとつとこう」部屋に戻って続きをやり宿題の相談をしていると従兄いとこが帰ってきて「ケーキを買ってきたから食べよう」と白い箱を食卓に置いた。仕事帰りらしくスーツを着ている。「ケーキだって！」ホナミさんが嬉うれしそうに笑った。「記念ケーキだね」従兄は訝いぶかしげに「なに記念？」「トンボの羽化。さつき、ついさつき羽化したの」「ほー」と従兄は言う到着替えるのか部屋を出て行きしな、俺おれも見たかったなーと棒読みのように言った。ホナミさんはそれが聞こえていなかったのかなにも答えず笑顔のまま台所に入るとお湯を沸わかかし始めた。

自転車に乗って帰った。結果的にいつもより授業スタートが早かったので帰るのも早かった。ついこの前まで自転車に乗っていると汗だらけになっていた。いまは風が気持ち良い。③行きとは違うゆったりした速度で漕いだ。帰宅し、自転車を降り、前かごからリュックサックを取り出すと、黒い布地の表面が小さく光った。トンボがひしやげて潰れてくっついていて、翅は胴体から外れ布地に張りつき、黄色い胴体はねじ曲がり、黄色と緑の筋が曖昧に崩れている。細い脚は繊維にめりこんで砕けている。僕はそつと、最も丈夫そうな背中のところをつまんだ。翅のねじれた部分はもうなかった。布地から剥がすと意外なほど抵抗があった。胴体だけが取れ、頭は布地にくっついたままだった。④噛んでいた。目はまだ光っていた。薄い透明な翅が布地の凹凸をかすかに拡大して見せていた。

翌週従兄の家へ行くと、猿の絵の隣に小さい額縁が増えていた。絵ではない。写真でもない。近寄ってみると、厚みのある黒い枠の中にトンボの抜け殻がピンで固定してあった。左側にくしゅつと曲がっている。「標本を飾る用のやつを買ったの」授業中、抜け殻の上を丸い光が揺れて覆った。ヤゴのケースは片づけられていた。「あとは、メダカの冬越しが問題だね」僕は頷いた。三年生になるとき、ホナミさんが妊娠したという理由で家庭教師は終わりになった。僕は母親の言うまま塾に入り高校受験勉強をした。母親が、やっぱり素人の家庭教師だと⑤セイセキがそんなに上がらなかったと誰かに電話で言っているのが聞こえた。いくら身内でも結果が出なくちゃね、やっぱりプロよ……ホナミさんの出産が済み、お祝いを渡すという母親に連れて行かれた。従兄の家には猿の絵も抜け殻の標本もメダカの鉢もどれもなくなっていた。庭には物干し竿が置かれ、たくさんのタオルや肌着が干してあった。風が吹いたのか急いでやったためなのか、洗濯物は重なり合ったりめくれたりしていた。ホナミさんは僕に赤ん坊を見せながら「受験まで面倒見てあげられなくてごめんね」と言った。僕はいまでもあのトンボの三角形の頭を持っている。⑥目はまだ澄んでいて、覗くと奥のほうで光が反射しているのが見える。

(小山田浩子「はね」『文學界』二〇二二年二月号 文藝春秋)

問一 a   c  のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 線部①とありますが、なぜ「ホナミさん」は、このような「よくわからな」い話しぶりになったのですか、説明しなさい。

問三 ——線部②とありますが、「ホナミさん」はどのような気持ちからこのように言ったのですか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア せっかくここまで育ててきたトンボが、翅はねの一枚が潰つぶれてねじれ自力では生きていけないと思われ、飼かって世話してあげたいと思っ  
たから。

イ ヤゴのころから育ててきたトンボがやっと羽化したものの、そのか弱く体を震ふるわせる姿に情が移うつってしまっつて、手放はなしたくなっ  
たから。

ウ トンボを飼かったことなどなかったから、いざ飼かおうと思っつても、トンボの餌えさも、飼か育そのためのかごもどうしたらよいかわからな  
かったから。

エ トンボの翅はねがねじれて伸びていないのは、ヤゴを捕つかまえるときに自分が傷きずつけたからにちがいないと考かんえ、罪滅ほろぼしをし  
たいと思っ  
たから。

オ ヤゴを捕つかまえて羽化はするところまで世話をしたのだから、次はトンボを飼か育そするところまでやっつてみたいと前向きな気持ちになっ  
たから。

問四 ——線部③とありますが、「ゆったりした速度で漕こい」でいるときの「僕ぼく」の心情を説明したものととして最も適切なものを、次の中  
から一つ選び、記号で答えなさい。

ア トンボの羽化はに生命の神秘を感じ、心地よい風の中で自然に包つつまれたようなあたたかい気持ちになっている。

イ いつもより早く家に帰ることができたので時間に余裕よゆうがあり、のんびりとした気持ちになっている。

ウ 授業に昼食ひるめしにトンボの羽化はと、たくさんおの出来事できごとが続ついて、疲つかれてしまい身体からだが重おもく感じている。

エ だんだんと涼すずしい季節きせつになってきたので、さわやかな風を感じながらゆっゆっくりと帰かえりたいと思っつている。

オ 羽化はしたトンボを見られただけでなく、無事に飛び立たったことに安心し、おだやかな気持ちになっている。

問五 —— 線部④とありますが、このトンボの姿を見ている「僕」の心情を説明しなさい。

問六 —— 線部⑤とありますが、このときの「僕」の心情を説明したものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ホナミさんの家からサルも抜け殻もメダカもなくなって、家の中心には生まれてきた赤ん坊がいることに気づいて、命は古いものから新しいものへと移り変わっていくものだと感じ、その尊さに身の引きしまる思いを感じている。

イ ホナミさんの家では、赤ん坊が手を出してけがをしてしまいそうな危ないものはすっかり片づけられており、おちちよこちよいな自分の母親も「僕」をそうやって大事に育ててくれたのだと気づき、感謝の気持ちをいただいている。

ウ 子供の生まれたホナミさんの家から、家庭教師をしてもらっていた当時の品々がすっかり片づけられていることを見て、もうすでにホナミさんの中では自分との思い出が薄れてしまっていることに、時の流れを感じ感傷的になっている。

エ 絵も抜け殻もメダカの鉢も、ホナミさんが「僕」と仲良くなろうと気をつかって用意してくれていたのだと今になって思い、当時はその優しさに気づかずにおちちよこちよいだと思ってしまうていた自分を恥ずかしく思っている。

オ ホナミさんの家に通っていたときに置いてあった物がすっかり無くなり、代わりに赤ん坊のためのタオルや肌着が干してあるのを見て、赤ん坊にホナミさんを取られたような気持になって、やりきれないさみしさを感じている。

問七 —— 線部⑥とありますが、これは「僕」のどのような心情を表していると考えられますか、説明しなさい。

問八 この作品の作中人物や表現技法について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) この作品の作中人物について説明したものとして適切でないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母親は、ホナミさんが留学経験があると勘違いするようなおちちよこちよいな面もあるが、子供の教育に関心を寄せ、育児に忙しい母親像として描かれている。

イ ホナミさんはヤゴを飼ったり抜け殻を残しておいたりと面倒見がよい反面、不器用なところもあり、子供のような純朴さで「僕」に寄り添う人物として描かれている。

ウ 従兄は仕事に忙しいながらも家族思いの父親で、トンボの羽化に興奮するホナミさんに共感してトンボに興味を向ける少年のような人物として描かれている。

エ 「僕」は周囲をよく観察する落ち着いた人物であり、大きく感情を波立てることはないが、一つ一つの出来事を静かに心に刻む感受性豊かな少年として描かれている。

(2) この作品の表現技法について説明したものととして適切でないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア トンボの伸びきらなかった翅を「掬いきれなかった卵の白身」でイメージさせるように、さりげない表現と巧みな描写で作品世界を重層的に描き出している。

イ 心情をわかりやすく描写するのではなく、「僕」の目に映る作中人物や事物をていねいに描き出すことで、「僕」の心情を読者に感じ取らせようとしている。

ウ 自然を代表する存在としてトンボを登場させ、生き物の力強さと命のはかなさ、尊さをその死をもって「僕」に教え、少年の成長を促す存在として描いている。

エ 会話のところも改行せずに文章を書き連ねていくことで、息つくひまを与えず読者を物語世界に引き込み、考える間もなく「僕」の心情を共感させている。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が85の国と地域に行っていると言うと、「一番驚いたのはどこか」とか「一番面白かったのはどこか」とか、聞かれることがあります。この質問に答えるのは難しいですね。一つひとつの国に行くたびに新たな発見がありますから。

初めてアメリカへ行ったのは30代後半くらいでした。フリーウェイを走ると、行けども行けども同じような景色が続きます。アメリカがこれだけ広くて、とてつもない国だと知っていれば、日本は戦争なんかしなかっただろうにと思いました。アメリカに行って最初の印象がそれでしたね。

コーラを注文しようとして、コーラと言っても全然通じなくてコーヒーが出てきたこともあります。自分のちよつとした英語がまったく通じないことがわかりましたね。そのうちに、あっ、そうか、平坦に言うからわからないんだと、アクセントをつけてみました。「コーク、ブリーズ」と言ったら、今度は「ペプシでいいか」と言われました。コークはコカ・コーラの愛称で、ペプシコーラはコークと言わないだ、だから確認してきたんだな、と。そんなところで突然の発見をしたことを覚えています。

ドイツでは、旧西ドイツの地域を歩いているとききれいな街が多いのですが、旧東ドイツ地域に行くと、貧しいところが今でもいくつもあります。ああ、そうか、統一されてもこんなに格差があるのだ、ということがわかるんですね。

とりあえず、行く前にいろんなことを調べるのですが、行って初めてわかることがいくつでもある。また、それが面白いわけです。

日本のサービスが良すぎて、海外へ出るとマナーが悪いと誤解されてしまうこともあります。

アメリカにしても、ヨーロッパにしても、自動ドアがほとんどありません。開き戸式の自動でないドアを押して開けて、そのままパツと放ちてしまうと後ろの人の顔を直撃します。ということは、後ろに誰かいないか確認して、もし子どもを抱いたお母さんがいれば、その人たちが通るまでドアを開けたままにするというのがマナーになるわけです。

日本人は自動ドアに慣れているものだから、後ろの人のことなんか考えないでパツと手を放してしまう。ドアがバーンと返っていった後ろの人の顔を直撃するということがあちこちで起きています。日本人のマナーはどうなっているんだ、と思わぬ誤解をされている、ということがあります。

これに類似しているのが、タクシートのドアです。日本のタクシーは自動ドアでしょう。アメリカはそうじゃないから、日本人はタクシーを

降りたあとドアを閉めずに行くと言われて評判が悪いのです。日本は何でも至れり尽くせりで、サービスがいいゆえに思わぬところで足をすくわれるのですね。

文化や習慣が大きく違う国も面白いところです。中東へ行くと、握手は必ず右手でします。左手はお尻を水で洗う不淨の手とされているからです。中東の公衆トイレに入ると、みんな左手を使って水でじゃぶじゃぶとお尻を洗うものだから、床が水だらけになっています。ああ、日本の温水洗浄便座っていいな、と思います。今になってようやく中東の人たちの間で洗浄便座が人気になっています。こんなことも行ってみて初めてわかるというわけです。

(池上彰『なぜ世界を知るべきなのか』小学館)

問一 ——線部とありますが、どういう点でマナーが悪いと誤解されるのですか。八〇字以内で説明しなさい。

問二 本文を読み、日常生活の中で文化や習慣、考え方などの違いによって誤解が生じることについて、あなたはどうか考えますか。具体的な例を挙げながら、そこからわかったこと、考えたことについて、三〇〇字以内で説明しなさい。